

「恵みの選びにより残された者たち」

ローマ11：1-10

堀田修一 24・4・7

I イスラエルという国としての救いではなく、イスラエル人一人一人の救いをパウロは語っている

1. 「それでは尋ねますが、神はご自分の民を退けられたのでしょうか。決してそんなことはありません。この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫、ベニヤミン族の出身です」：1。正真正銘のイスラエル人であるパウロが（国としてではなく個人で）救われた以上、「神はご自分の民を退けられた」のではない。少なくともイスラエルの民全体が退けられたのではない。イスラエルという国全体、民全体としてのイスラエルではなく、イスラエル人一人一人が自分の罪を認め主を信じ救われるのを神は待っておられる。

2. 「神は、前から知っていたご自分の民を退けられたではありません。それとも、聖書がエリヤの箇所で言っていることを、あなたがたは知らないのですか。エリヤはイスラエルを神に訴えています。『主よ。彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇を壊しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを狙っています』」：2, 3。エリヤは、バアルというカナンの神（偶像の神）に仕えるイスラエルの中で、真の神に仕える孤高の預言者。エリヤは全能の神に抛り頼み彼らとの戦いに、たった一人で勝利を収めました。しかし、その後、自分の命が狙われていることを知らされると、恐怖のあまり死を願って神に訴えました。「主よ、もう十分です。私のいのちを取ってください。私は父祖たちにまさっていませんから」（I 列王記19：4）。※聖書にこの箇所があることは、非常に重要です。現代で言われる燃え尽き症候群の状態です。エリヤは、それまで、神に頼りどんな敵対にも負けず、大勝利を上げました。しかし、その直後、勇敢なエリヤの姿はなく、「私のいのちを取ってください」と神に願ったのです。ここから教えられることは、長い激しい戦いに勝利した時に、大きな喜びが来ることもあれば、逆に、激しい落ち込み、鬱状態がやって来ることもあるということです。現在は心理学の分野で教えられることですが、全地全能の神は、はるか昔、心理学が発展していない時から、このように深くエリヤの心理、霊的な状態を真実に聖書に記されていることは、すごいことと思われる。現在の私たちへの教訓となる貴重なみことばである。「立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい」（I コリント10：12）。

II 神は、どんなに背信、迫害の時代でも、神を信じる忠実な「残された者たち」を備えておられる

1. 「しかし、神が彼に告げられたことは何だったでしょうか。『わたしは、わたし自身のために、男子

七千人を残している。これらの者は、バアルに膝をかがめなかった者たちである。』」：4。神に従うのは自分一人と落ち込むエリヤに神は励まして事実を語られます。女王イゼベルの権力によってイスラエル民族の中に持ち込まれたバアル（偶像の神）礼拝に参加することなく、まことの神ヤハウエに忠実である者を七千人も残しておられたのです（I 列王19：18）。エリヤ

にとって思いも及ばないことでした。昔も今も神は生きて働いておられます。激しい迫害により、神への信仰者がいなくなるような状況でも忠実な信仰者＝残りの民が神により備えられ、かえって、共産圏や信仰や言論の自由が認められない迫害の中、むしろ御聖霊によるリバイバルの働きでキリスト者が多く起こされた歴史があります。現在も。現在、約24億人のキリスト者が神によって生まれている。世界人口の約32%。※反対の中の信仰。

2. 「ですから、同じように今この時（今の時代）にも、恵みの選びによって残された者たちがいます」：5。多くのユダヤ人は不信仰でキリストの福音に反対しているように見えるが、神の恵みの選びにより、まだ「残された者」がいます。「残された者」（原語：レイムマ）ということばは、新約聖書ではここに使われているだけ。圧倒的な不信仰の中であって、真に神の民であることができるのは、自分の功績や努力によるのではなく、あくまで神の自由な恵みと選びによるものです。私たちが、今、神の恵みの選びで主を信じ救われている恵みを驚きつつ喜び賛美しましょう。応答の賛美304「恵みのひびきの」。

3. 「恵みによるのであれば、もはや行いによるものではありません。そうでなければ恵みが恵みでなくなります」：6。この節は、恵みの強調です。「恵み」と「行い」は、救われる条件としては、対立する概念です。人間の行い、功績、努力によって救われるのなら、主の十字架の恵みは必要ではなくなります。しかし、現実としては、この世に存在するすべての人間は、自分の完璧な行い（心にも悪い思いが一切ない）によって神に義（正しい）と認められ救われる人は一人もいないのです。すべての人（イスラエル人も）は、罪深く、神に救っていただくためには、主の十字架と復活の恵みを必要としています。

4. 「では、どうなのでしょう。イスラエルは追い求めたものを手に入れず、選ばれた者たちが手に入れました。ほかの者たちは頑なにされたのです」：7。イスラエル民族が熱心に求めている神の義、救いを彼らは得ることが出来なかった。彼らのうち選ばれた者たちだけが、主を信じ救いを得、ほかの者たちは頑なにされた。「頑なにされた」とは、霊的に覆いがかかり、理解が鈍いままにされる事→「イスラエルの子らの理解は鈍くなりました。今日に至るまで、古い契約が朗読されるときには、同じ覆いが掛けられたままで、取りのけられていません。それはキリストによって取り除かれるものだからです」（Ⅱコリント3：14）。これは神の主権的な働きであり、不信仰なイスラエル民族への神のさばきであり、その責任は神ではなくイスラエル民族にある。神は人に信仰を強制されず自由意志を重んじられる。神の救いの招きを拒み続ける者には「神は、彼らとその心の欲望（主を信じないままの自己中心）のままに汚れに引き渡されました」（ローマ1：24）。一方で神は、「だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです」（Ⅱペテロ3：9）。頑なに人々の救いの為に祈りましょう。

5. 「神は今日に至るまで、彼らに鈍い心と見ない目と聞かない耳を与えられた」と書いてありとありです。」：8。「鈍い心と見ない目と聞かない耳」は、霊的・倫理的に麻痺しているイスラエル民族の状態。

6. 「ダビデもこう言っています。『彼らの食卓が、彼らにとって畏となり、落とし穴となり、つまずきとなり、報いとなりますように。彼らの目が暗くなり、見えなくなりますように。その

腰をいつも曲げておいてください』：9，10。これは、イスラエル民族の多くの者たちが、神の選民であると誇り、神の律法を知っていることを誇り、かえって霊的に無感覚になり、神のみこころに反逆しているのを嘆く祈り。「彼らの目が暗くなり、見えなくなりますように」とは、イスラエル民族が霊的に盲目となり神の真理に気がつかないことを嘆く祈り。「その腰をいつも曲げておいてください」とは、いつまでも律法の重荷を背負い続けるがよいとの嘆きの祈り。キリストの福音という素晴らしいメッセージを拒否し律法による救いに固執する同胞に対する嘆きと祈りの言葉。本当はそうあって欲しくないという心があります。

Ⅲ まとめ

肉のイスラエルがそのまま真のイスラエルなのではないという原理に戻って、イスラエルの中でも、神の恵みの選びによって、「残された者たち」がいつの時代にもいるというのが本日の箇所の中心です。パウロは、イスラエルの全員が捨てられているわけではない証拠として自分自身が個人として救われた恵みを語ります。同様に、私たちキリスト者は、神を拒否する人が多い中で「残された者」として神の恵みの選びで救われた重みを自覚しもっと感謝しましょう。頑なな私たちが主を信じ救われたのは驚くべき恵みです。ある人の心は福音に対して柔らかくされ、ある人々は頑なです。私たちの人生の中でさえ、神に心開かれている時もあれば、心を固く閉ざしている時もありますね。ただ、心が頑なにされるということと、神に見捨てられることは違います。神は主を信じる私たちを決してお見捨てになりません。

神の救いは一方的な恵みであって、人の行いによるのではないからです。主の御名をほめたたえます！